

しい、ラディカルなことを言つてたやつが、たちまちわたしなんかをどび越して右がかったことを言い出し、やがて御稜威とか聖戦とかを口ばしるようになる。むしろ、いままでもなまぬいりべラルだと思つていた人のなかに、反動期になればなるほどシャンとしてくるという人がいる。むしろりべラルにもダラシないのが多かつたけれど、とにかく平素口で言っている思想だけではわからないものだという感じを痛切に味わつた(『普遍的原理の立場』「座談」⑦)。

「滝川事件以後、大学の顛落論がやかましかつた」のも二年生のときのことであつた。自由主義をテーマにした講演会もさかんに行われたという。折から「顛落自由主義の検討」(『中央公論』一九三五年五月)などが世に問われていた。そのようななかであつて、尾崎愕堂(行雄)の「復古主義批判」講演は「痛快をきわめ」るものであつた。なかでも尾崎が、「われわれの私有財産は、天皇陛下といへども、法律によらずしては一指も触れさせたまふことはできない」と述べたことが「電撃のごとくほくを襲つた」と丸山はいう。日本の左翼も私有財産攻撃をしているなかで、「いかなる権力も侵すべからざる権利としての私有財産」をいうのはヨーロッパ的であり、「愕堂というのは本当の自由主義者、数少ない自由主義者だと思ひました」と記す(『回顧談』(上)一七五〜一七八)。

ただし後年、松沢弘陽の質問に答えて、この件では「そんなに学問的反省をしたわけではな」く、「学問的に反省させられたのは南原(繁)先生です」と述べている。南原の拠つて立つ新カント派には「非歴史的なものの持つている強み」、すなわち「非常にはつきり、時代のほうが間違つてゐるのだ、時代は間違つた方向に歩みつつあるということ」を、当たり前のこととして「言える」のであり、「圧倒的に、時代がある方向に向いていきますと、歴史主義だと、これが歴史の動向なんだという主張にかなわない」。南原を通してうけたのは、「歴史主義に対する反省」だつたという(『回顧談』(上)二〇九〜二一〇)。南原は、丸山のヘーゲルへの傾倒ぶりをみて、ドイツではヘーゲリアンがほとんどナチスの陣営に行き、抵抗しているのはカント派であるとして忠告しており(『思想史の方法を模索して』「集」⑩)、丸山は、それが南原から「私のいちばん学んだ点の一つ」だとも述べている(『一哲学徒の苦難の道』「座談」⑤)。マンハイムこそはイギリスに亡命という手段をとつたが、丸山は、「眼前にする日本の知的光景においても、知識社会学者からマルクス主義者にいたるまで、その知的転向は、おおむね「階級」を「民族」に置きかえることによつて、歴史的存在による意識の拘束性という同じ命題を掲げながら進行してゐたのです」という(『思想史の方法を模索して』「集」⑩)。

一九三六年、二・二六事件が起こつたのも二年生の終わりであつた。すでにNHK(社団法人日本放送協会)に勤めていた兄から午前中に第一報が入り「本郷にすつ飛んで行つた」が、「何がどうなるかわからないという感じ」で「大変な日」であつた。いかなるファシズムも初期においては急進的で反資本主義的なことをいうと考へていた丸山は、その夜、この事件は「根本的には進歩的だよ」という兄と「大激論」を交わしたという。折から、その直前二月二日には、美濃部達吉が右翼に狙撃されるといふ事件もあつた(『回顧談』(上)一七九〜一八二)。加えて「法・経両学部には、軍部や右翼に、前からいらまれていた教授が少なからずいたので、決起した軍隊が、東大にも押しかけてくるといふうわさがあつて、学内は無気味な緊張につつまれてました」と丸山は回想している(『一



図6 1939.8 前ユッテ女高師の発（「発の女高師ヒユッテ前 1939.8
I 「君、あの娘好きなんじゃないの」 M 「うーん、
さうでもないさ」との自筆裏書き、丸山彰氏提供）

という両面に、私ははからずも入門早々にして接したのであります」と敬意を貫いている（「南原先生を師として」『集』⑩）。

*当時の法学部の助手には身分の保証がなかったので、南原から「田舎に行つて中学の先生になるつもりはあるか」とも言われたとの回想もある（「同人結成のころのこぼれ話」『集』⑮）。

**のちの回想でも丸山は、助手になつてまもなくのころ、南原から「『思想の存在拘束性』という考え方は思想史はダメだな」とはつきりいわれたのを覚えて居ります」といい、それは「私が学生の時に書いたさきの緑会論文で、カール・マンハイムの『存在拘束性』という用語を引用したのであります。先生はそうした根本の方法論について恐らくいわれたものであらうと思ひます」と述べている（「南原先生を師として」『集』⑩）。

丸山は助手の三年間の時代を「まったく充実していましたね」というとおり、助手仲間と食事に رفتたり勉強会をしたりと楽しそうな様子を語っている。なかんずく末弘巖太郎の研究室に「居候」していた戒能通孝からは、ウエーバーの『経済と社会』を教わる機会にもなつた。また史料編纂所にいた歴史学者の小西四郎を呼んで明治維新史、幕末維新史を学び、さらには土屋喬雄『日本経済史概説』の勉強会を行つたりもしたという（「回顧談」（上）二二六、二二七、二一九、引用順）（「一哲学徒の苦難の道」『座談』⑤）。しかし、一方では専門の勉強に忙しくなり、また毎月『国家学会雑誌』の編集に追われるという日々でもあつた（「回顧談」（上）二一九、二二二）。

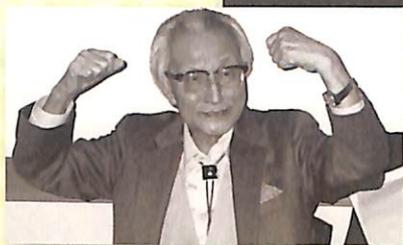
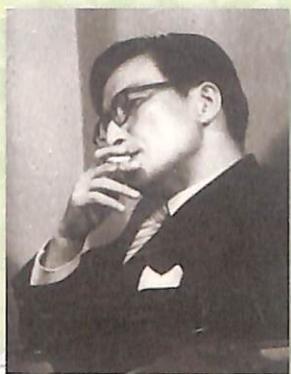
東洋政治思想史講座の開設と津田左右吉の受難

日中戦争が始まつた一九三七年の暮れには矢内原事件が、一九三九年一月には人民戦線事件が起こり、またいわゆる平賀肅学が行われた。平賀肅学とは、平賀讓東大総長のもとで、河合榮治郎の著書が発禁になつたのを奇貨として、平賀、そして法学部長の田中耕太郎と経済学部長の舞出長五郎が、河合を犠牲にして土方成美ら革新派を一掃しようとした事件で、法学部教授会も、田中と、田中に原理原則から反対する南原、そして南原について革新派を擁護しようとする人びとの二つに分かれて

評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり



著者紹介

黒川みどり (くろかわ みどり)

早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士
後期課程満期退学 博士 (文学)

現在、静岡大学名誉教授

主要著書：『共同性の復権』(信山社、2000年)、『描かれた被差別部落』(岩波書店、2011年)、『差別の日本近現代史』(共著、岩波書店、2015年)、『創られた「人種」』(有志舎、2016年)、『評伝 竹内好』(共著、有志舎、2020年)、『被差別部落認識の歴史』(岩波現代文庫、2021年)、『増補 近代部落史』(平凡社ライブラリー、2023年)、『被差別部落に生まれて』(岩波書店、2023年)

評伝 丸山眞男——その思想と生涯——

2024年3月10日 第1刷発行

2024年6月20日 第2刷発行

著者 黒川みどり

発行者 永滝 稔

発行所 有限会社 有志舎

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-19-2

クラブハウスビル1階

電話 03(5929)7350 FAX 03(5929)7352

DTP 言海書房

装幀 折原カズヒロ

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 モリモト印刷株式会社

© Midori Kurokawa, 2024. Printed in Japan.

ISBN978-4-908672-72-9

最後になったが、『評伝 竹内好』(二〇二〇年、有志舎)の共著者であり一二年間私の同僚でもあった山田智氏は、私の伝えたいことを最もよく理解し、その上で率直に批判もしてくださるかけがえない存在である。先にも述べたように丸山を理解し評価する人が歴史学にも部落問題の研究者にも皆無に近いなかにあつて、私は氏に自分の考えをぶつけ氏の意見を聞かせていただくことで、ともかくもここまでたどり着くことができた。山田氏の存在があつてこそ今の私の研究があると思つている。丸山が竹内好を「親友」と称したように、私にとつての山田氏にはその言葉がふさわしい。丸山彰氏の御宅で写真をスキャンしていただいたのに加えて、丸山の著作などの撮影も含めてすべて本書の写真の手筈を整えてくださったのは、ほかならぬ山田氏である。

ほかにも、個々にはお名前をあげないが、多くの方々のお世話になつている。以上の方々にご心よりお礼を申し上げます。

二〇二三年九月二〇日

黒川みどり